

巻頭言

時代の交差点  
コロナ禍の中で…

高橋 伸治  
平野 泰宏  
5 4

特集 1

第2期中期経営計画進捗報告 その②  
教育・研究・社会連携領域  
2年目の報告と3年目に向けて  
社会連携の取り組み

今井 重男  
榎戸 敬介  
17 6

特集 2

活躍する卒業生 東京2020オリンピック・パラリンピック  
パラリンピック ポッチャ競技 銀メダル獲得  
オリンピック体操競技審判員として  
—大学で学んだ新しい観点、多面的な視点の在り方—  
新型コロナウイルス感染症拡大防止に対する本学の取り組み  
（2021年度秋学期授業開始に向けて）

高橋 和樹  
高橋 孝徳  
24 26

学園より

学生活動紹介

公認会計士試験への挑戦  
学生ベンチャー食堂「彩食菜」

山口 晴天  
木村 海音  
38 40

ゼミ紹介

サービス創造人間になるために学問を学ぶ機会を提供する

吉田 優治  
41

CUCレポート

- ニュース・イベント  
瑞穂会が簿記チャンピオン大会で2連覇！個人戦でも1位！／ほか
- 国際センターニュース  
千葉商科大学の国際化ビジョンー留学生が多様性理解のキーとなるー
- 地域連携推進センターニュース  
国内研修プログラム制度（国内研修費補助制度）について／ほか

橋本 隆子  
52 56

	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ キャリア支援センターニュース</li> <li>就職支援の今後を見据えた中間総括</li> <li>— 2021年度withコロナから2022年度afterコロナに向けて —</li> </ul>	川瀬功	58
	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ The University DINING ノーブル</li> <li>学生食堂で南国気分「Hawaiian Week」を開催／ほか</li> <li>ライブラリーニュース</li> <li>第6回書評コンテスト課題図書展示／ほか</li> <li>■ SONMから読者のみなさまへ</li> <li>熱を逃がさず賢く省エネ！トイレ編／スマホの省エネ</li> <li>■ 文化団体・体育会所属各部等の活動状況</li> </ul>		68 66 64 62
	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ 急性混合性白血病との闘い</li> <li>酷暑五輪のレガシー</li> </ul>	藤山幸一 手賀洋一	71 70
	<p>随筆</p>		
	<p>教育後援会活動</p> <p>教育後援会活動報告</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>■ 保護者寄稿</li> <li>入学前から先を見据えた課題 すきなことに挑戦 そして社会へ</li> </ul>	中川奈見	79
	<p>同窓会活動</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>■ 本部からの報告</li> <li>■ 支部からの報告</li> <li>■ 同期会からの報告</li> <li>■ その他特定団体からの報告</li> </ul> <p>卒業生のお宿・お店紹介「大原旅館」</p>	広報・I委員会 藤原聖一	80 80 82 83 87
	<p>CUC経営者会議</p> <p>CUC経営者会議ニュース</p> <p>CUC経営者会議会長就任にあたって</p> <p>2021年度総会について</p>	安藤昭	88 89
	<p>著書紹介</p> <p>『IT戦略の日本政策比較分析—1970—2020年を中心に—』</p> <p>著者・蔵田幸三</p>	蔵田幸三	95
	<p>▼同窓会支部事務局一覧</p> <p>96</p> <p>▼編集後記</p> <p>98</p>		

# 時代の交差点

高橋 伸治

● 千葉商科大学同窓会会長  
(昭52商)



様々な想いの中で開催された東京オリンピック・パラリンピックが終わりました。コロナ禍とともに時代の大きな節目となった、記憶に残るイベントになったと考えられます。新型コロナウイルス感染症による「緊急事態宣言」の中で、対策に追われた関係者の皆さまには、日々状況が変わるといふ現実に向き合い、大変な努力をされたことでしょう。大学生を含むボランティアの皆さまもたくさん経験をしたでしょうし、心から敬意を表したいと思います。

私たちはいつも「何ごともチャレンジしていかなければ成長はない」と言ってきました。しかし、今回の出来事では悩むことばかりで、一歩も進めない状態でした。まだまだ続くコロナ禍で、私たちは少しずつ自分を取り戻さなければなりません。オリパラ競技の中で「絶対王者」と言われていた多くの選手たちが、結果を出せずに去っていききました。スポーツの力はたくさんの方を教えることができました。十分な気力と準備が出来た人たちが次の時代を創っていくことも現実です。

今回の東京オリパラ大会で感じたことは、「サーフィンを」や「スケートボード」で日本選手が世界の頂点に立つ

ていたことです。私たちが知っているスポーツの概念では考えが及ばない世界がすでに出来上がっています。私たちが知らない世界で努力に努力を重ねて頂点に立った人たちがいます。これからも、このようなことがスポーツの世界だけでなく、たくさん起きてくると感じています。時代は間違いなく、かなりのスピードで変わっています。

イノベーションとは、非常識が常識に変わることを言います。昨日まで常識だと思っていた事象が「新しい時代」に通用するかどうかを常に考えなければいけない時代を迎えています。変化する社会では知識の有効期限は非常に短くなっています。特に今回のコロナ禍は、ほとんどの人たちが経験も知識もない出来事です。これから何が起き、どのような状況になるかは、予想は出来ても予知は出来ません。若い人たちが考えていることと、専門家と言われる中高年者が考えていることは違って当然です。

今まで以上に、コミュニケーション能力が必要な時代になったと感じています。

『きずな』第7号(2011年10月刊行)の新企画としては、  
じまった「活躍する卒業生」。その記念すべき第1回登場者は、  
このたびCUC経営者会議新会長に就任された安藤昭氏(当  
時、富士屋ホテル株式会社代表取締役社長)でした。

以来同コーナーには、経済界、政界、金融業界、起業家、  
ミュージシャン、武道家から、前36号に寄稿いただいた警視  
庁捜査第一課長の福山隆夫氏まで、実社会で活躍する多士  
済々たる同窓生、総勢28名が登場し、本学での学生時代から  
今に至るまでの貴重な経験談を披露されました。

今号では特集として、「東京2020オリンピック・パラリ  
ンピック」で活躍されたお二人の同窓生をご紹介します。

## 東京2020パラリンピック ボッチャ(ペアBC3) 本学卒業生の高橋和樹選手が銀メダルを獲得!



高橋 和樹 選手  
商経学部経済学科 2003年卒業  
株式会社フオーバル所属  
写真提供:(一社)日本ボッチャ協会

9月4日、有明体操競技場で行われた準決勝で世界ランキ  
ング1位のギリシャに勝利し決勝に進んだボッチャ競技BC  
3クラス。ペア日本代表チーム。韓国との決勝戦、3点リー  
ドを追う最終第4エンド、チームリーダー高橋選手の驚異の  
粘りで3点を奪い返し土壇場でタイブレイクに持ち込むも、  
日本チームが放った最後の投球はわずかにそれ、銀メダルと  
なった。

高橋選手は高校2年生の時に柔道の試合で頸椎損傷の  
大ケガを負い車椅子での生活になりました。その後、高  
校に復学され、1999年、本学商経学部経済学科に入  
学しました。

卒業後、埼玉県のNPO法人「自立生活センター」くれ  
ばすで働きながら一人暮らしをしていた高橋選手は、今  
から8年前の2013年9月に東京オリンピック・パラ  
リンピックの開催が決まったとき、その時点では何もス  
ポーツをしておらず、何の競技に出られるかさえわから  
なかったのに「自分は東京パラリンピックに競技者とし  
て出る!」と決意します。そこから出場できる競技を探  
し、唯一可能性があるとして始めたのがボッチャでした。

ボッチャは緻密な頭脳戦が醍醐味のヨーロッパ生まれのバラスポーツ。ジャックボール(目標球)と呼ばれる白いボールに、赤・青それぞれ6球ずつのボールを投げたり、転がしたりして他のボールに当て、いかにジャックボールに近づけるかを競う。高橋選手が出場するBC3クラスは、ボッチャ競技の中で障がいの状態が最も重度なクラスであり、手や脚を使って投球することができないため、ランプという投球補助用具の使用とランプを操作するスポーツアシスタントの参加が認められている。

2014年の埼玉県でのデビュー戦では中学生にも負け、「埼玉で一番弱い選手」からのスタートだった高橋選手は、わずか1年後には個人戦優勝、2年後の2016年には北京の世界選手権大会で2位、さらにリオパラリンピックに日本代表として出場する快進撃を続けます。

そして本年、決意通りに東京パラリンピックに出場し、銀メダル獲得という偉業を成し遂げました。

\*

10月14日、「東京2020パラリンピック千葉県ゆかりの選手に対する表彰」で、高橋選手が千葉県知事賞を受賞されました。おめでとうございます。



2017年 本学授業での講演  
「迷っているぐらいなら動いてみるのが大切」と語る高橋選手



講演録を掲載した『きずな』23号

高橋選手はリオパラリンピック出場後の2017年、本学の授業で講演くださり、その講演録が『きずな23号』に掲載されています。

有言実行を果たした不屈の精神とたゆまぬ努力、自ら道を切り開く行動力が余すところなく語られた貴重な講演録の全文をこのたび本学Webサイトで公開しました。高橋選手のメッセージ、ぜひお読みください。

高橋和樹選手講演録

<https://www.cuc.ac.jp/news/2017/nstsp0000021dkw.html>



# オリンピック体操競技審判員として —大学で学んだ 新しい観点、多面的な視点の在り方—

## 高橋孝徳

東京国際大学勤務  
日本体操協会審判委員会体操競技男子審判本部 本部長  
平成3年 商経学部経営学科卒業

2021年7月23日、オリンピック東京大会が開幕しました。世間の注目はオリンピック本来の開催意図から遠ざかり、外野での出来事が多く取り沙汰された状況での開催でした。それでも競技が始まるとアスリートの真摯な姿勢、パフォーマンスに焦点が向けられ、声援が増えていったことは嬉しく感じました。

私は体操競技の審判員として国際体操連盟から指名を受け、任務にあたることになりました。指名は世界選手

権やワールドカップ等での実績から1カ国1名のみ選ばれます。審判員として関われることは大変光栄なことです。世界最高峰の大会、それも自身が住む町で開催される。地元開催のオリンピックで審判できるのは、世界でただ一人。そう考えると嬉しさはもちろんありましたが、それ以上に責任の重さ、プレッシャーを強く感じたことは言うまでもありません。

この審判資格を取得したのは大学三年生の時でした。



当初は「競技をするうえでルールを知っている方がいいだろう」程度の気持ちで受講したことを覚えています。大学時代はこの資格を活用することもなく、初めて審判活動したのは卒業してからでした。

大学時代を振り返りますと、大学一年生の春、競技を頑張るつもりで器械体操競技部に入学しました。しかし、入部と同時に体育会本部役員になるように指令されたのです。当時、体操部には四年生の先輩が一名のみ。部存続のために体育会本部に入ることが入部の条件でした。

当初は裏方のポジションへの理解を持ち合わせていない嫌々務めていましたが、徐々にその任務の魅力を感じ、のめり込んでいきました。スポーツへの関わりでいう「する・みる・支える」の「支える」の部分を知るきっかけでもありました。

入学時の私は競技者として「する」ことしか頭にありませんでしたが、「支える」という今まで意識したことのない観点を持つことになりました。大学でお世話になった恩師や職員の方々、ともに大学生生活を過ごした先輩、同期、後輩たちのおかげで、私の狭い視野は拡がり、多面的な視点からの見方、関わり方を気づかせてくれる契機

となりました。その後、当時の事情もあり体操部、体育会本部、本部応援団と兼任しながら携わることになりましたが、とても充実した学生生活を送ることができました。卒業後は一般企業に勤めましたが、数年後、ふと人生の行く末を考えるようになり、一念発起し大学院に進みました。専攻は大学とは畑違いのスポーツの分野でしたが、小学一年生から続けていた体操競技の世界に行くことは不安よりも楽しみの方が大きかったと記憶しています。また、この決断に対し大学時代の仲間たちが背中を押してくれたことには心より感謝しています。

大学院修了後は、浦安市総合体育館でのトレーナーから専門学校、大学へとシフトチェンジし職に就きました。徐々に仕事が増えていく状況でも審判員を辞めることなく継続していきましたが、経験を重ねるにつれて大きな競技会にも呼んでいただけるようになり、益々没頭していきました。ただし、この時はまだ趣味の領域でありました。

大きく転換したのは2005年。日本体操協会審判部から声がかかり、中央組織の一員になった時で、趣味の領域から責務を負う立場と変わり、仕事の傍ら一年中、



審判活動に従事する日々が始まったのです。

2013年に2020年のオリンピック開催地が東京に決まり、オリンピックに向けた人事も動き始めました。審判本部長を打診されたときには、大変悩み、自分の心の中で何度となく問いかけました。「動機善なりや、私心なかりしか」。東京オリンピックに向けて自分は何か出来るのであるのか、その立場に欲で就こうとしていないか。世界で勝つためには強化本部長・監督とともに両輪として進んでいかなければなりません。随分と悩み、考え抜いた末にお引き受けることにいたしました。

この時、自らの約束事として三つのことを念頭に置きました。一つ目は立場が変われども、今までの視点を絶対忘れないこと。視点が固定されてしまい、多面的に物事を捉えられなくなると、進化は止まると考えました。二つ目は目の上のたん瘤を必ず置いておくこと。自分自身を叱ってくれる方、間違いを正してくれる仲間を排除してしまうと、適正な方向から外れても簡単に修正できなくなると考えました。三つ目は水は流れなければ汚れていく。常に流れを止めず新鮮な状態に保つこと。組織を運営するにあたり、同じ顔触れのままでは柔軟な考え

方、判断力が硬直化し新鮮な発想が生まれません。また、様々な事業を前年度から踏襲するだけにすることは形骸化してしまうと考えました。これらは自分自身にも当てはまり、同じポジションに長い年月しがみつくことの無いようにすべきだと言いつけました。

2015年4月から審判本部長に就任し全日本選手権、日本代表決定競技会、インカレ、インターハイなどの全国大会で審判長を務め、併せて強豪国の分析のために多くの国際大会に出向き視察を行う日々が始まります。勤務する大学での授業をしながらの活動でしたので、週末に授業が終わるとそのまま競技会に向かい、海外遠征では週明け早朝にヨーロッパから帰国し、そのまま授業に向かうことなども珍しくありませんでした。

2015年の世界選手権、翌年のリオデジャネイロオリンピックで団体金メダルを獲得、内村選手が個人総合でオリンピック連覇を成し遂げ素晴らしい成果を残すことが出来ました。しかし競技力は栄枯盛衰、強さが継続し続けることは難しいものです。他国の若手選手の成長が著しく、冷静に分析すると2020年にはメダル獲得





が厳しい状況でした。そこに想定外の事態からオリンピックが延期となり、与えられた一年の猶予期間で建て直しを図りました。結果は橋本大輝選手の金メダル二個を含む四つのメダル獲得となりましたが、この勢いを2024年パリオリンピックに向けてさらに向上させたいと願っております。

審判員の判断は常に一〇〇%であるべきでミスは許されません。選手が何をしたのか、その都度、様々な観点から瞬時に適切な判断を決定する必要があります。公平・公正さを保つためには常に冷静に、俯瞰した視点を併せ持ち採点する必要があります。新しい観点、多面的な視点の在

り方を私は大学時代に学んだと言っても過言ではありません。あの時の仲間との関わりがあったからこそ、オリンピックでジャッジを務めることが出来たのだと信じています。

「井の中の蛙大海を知らず」状態であった私に様々なことを教えてくださった恩師や仲間たちにこの場を借りて心よりお礼申し上げ、千葉商科大学でつながった絆に感謝し、これからも邁進していきたく存じます。

\*\*\*